

【ドイツ語】

いくつもあるドイツ語への窓口から あるドイツ語教員によるドイツ世界へのいざない

【1】 イメージとしてのドイツ

ドイツ、と聞いて、みなさんは、どんなイメージを抱かれるだろうか。かつて、ドイツ人は「清潔さ、時間厳守、正直さ」を「ドイツ的美徳」として自己申告していたようだ。自己申告であるから、それは願望表現であるに過ぎず、真実の報告ではありえていまい、と想像される。けれども、その影響力には結構馬鹿にならないものがあって、そこから、真面目で、堅苦しく、勤勉なドイツ人といったイメージが世界中に広がりもしているのではないか。（その種のドイツ人ジョークにはこと欠かない。）

私は、日本人とドイツ人しか知らないような者だから、比較の材料が決定的に不足していて、ドイツ人の特徴（特殊性）について云々する資格はないのだが、個人的経験に基づく「偏見」は、もちろん持ち合わせている。

1988年10月から1993年9月までの10学期（セメスター）を、私は（西）ドイツ——途中でドイツは統一されたのだが——フランクフルト大学の哲学部で学生として過ごした。

まず、博士課程に学籍登録するために口頭試験を受けなければならなくなった。これがなかなか大変だった。何から何まで自分で決めなければならなかった（決めることができた）。当時ドイツの大学では、主専攻以外に二つの副専攻科目を選んで勉強することが義務づけられた。その三つの科目で口頭試験に合格することが博士課程への受け入れ条件として課されたので、私は、主専攻の哲学のほかに、副専攻として日本学とプロテスタント神学を選んだ（安易な選び方だ）。次いで、試験してもらおう先生を自分で選び（といっても、副専攻の二科目には教授は一人しかおられなかったもので、選択の余地などなかったのだが）、その先生のところに向いて試験のテーマや日程を相談した。先生は「あなたは今までどんなことを勉強してきましたか」と質問される。苦しまぎれに私が何やら答えると、「ではそのテーマで試験しましょう」ということになった。

準備期間の何週間かが過ぎ、哲学の試験の日がきた。緊張しきって私は試験場である研究室に出頭したのだが、二人の試験官の先生の内の一人の姿が見えない。その先生、試験のことはすっかり忘れて自宅におられたのである。大急ぎで出てこられたので、遅ればせながら試験は何とか始まったが、私は「しめた」と思ったものである。試験官の先生に「貸し」をつくったような気分になって。

これに輪をかけて右往左往させられたのが、日本学の試験だった。ここでも最初、先生は試験のことを忘れておられた。それで試験は、まず延期。ところが、二回目に行くと、今度は、試験が当事者間の八百長にならないようチェック役としてその場に同席してもらおう先生を手配するのが間に合わなかった、というのである。そこで、再び延期。三

度目によろやく試験は行われたのだが、私の緊張感が着実に緩んでいったことはいうまでもない。

似たようなことは、博士論文提出の際にもあった。論文提出の締め切り日をいつにするかを係の人と相談して決めることになった。けれども、その締め切り日までには書けそうにない雲行きになってきた。そこで、おそろおそろ相談（お願い）に行くと、あっさり一週間の延期が認められた。さすがに、二回目の締め切り日には、徹夜して論文を完成させ、なんとか提出したのだが、係の人が私に言われることには、「あなたが提出一番乗りです。」

ドイツと聞くと、とてもきちんとした、悪くいえば堅苦しい人々の国、という印象が一般的なのではないか。私の経験したドイツは、もう少し肩の力が抜けた所だった。そこには、だらしなさの一步手前というぐらいの自由さ、杓子定規であるまいとする心意気のようなものが感じられた。問題は形式ではなく中身のだな——そんなことを考えていた。

【2】ドイツの言葉 = ドイツ語、ではない

言うまでもないことだが、ドイツ語はドイツの言葉とイコールではない。オーストリアの言葉もドイツ語だ。スイスでも多くの地域の言葉はドイツ語だし、リヒテンシュタインも忘れてはなるまい。イタリアにもドイツ語が話される地域がある（南チロル）。この地理上の事実は、歴史と関連しているのであって、しかも、この歴史がたいへん面白い。

私が大好きな本に『ヨーロッパ歴史地図』（原書房、2001年）がある。紀元前900年に始まり1997年まで、様々な時点でのヨーロッパの地図が全部で46枚載っている。そして、その地図ごとに、ヨーロッパは随分違って見えるのだ。国境の引かれ方が、という意味だ。ヨーロッパの国境というものがいかにコロコロ変わったか、には呆れずにはいられないものがある。

ヨーロッパの歴史にあって、スペインやフランスが一貫してかなり安定した姿形をしているのに対して、それが膨れたり縮んだり、変化のめまぐるしい国の一つにオーストリアがある。この国が今日のような姿形になったのは1918年であって、それ以前に今のような形であったことは一度もない。正確には、1918年までこの国は帝国として広大な領土をかかえる、はるかに大きな国だったのだ。16世紀にはスペインすら吸収し、スペインが世界中に植民地を持っていたものだから、「太陽の沈むことのない国」と豪語されたことすらあるぐらいだ。（大英帝国が、後に、この表現をパクることになる。）

19世紀には、領土の広さではロシアに続き、英仏露独と共にヨーロッパの五大強国の一つと見なされていた。ドイツがよろやく1871年に「統一」を成し遂げるまでは、むしろオーストリアこそ、ドイツ語圏第一の国だった。ボンやハンブルクで生まれたベートーヴェンやブラームスがウィーンに引っ越したのは、ウィーンが「音楽の都」だったからではあるが、ウィーンはただ「音楽の都」であっただけなのではない。当時のドイツ語圏のどの

街よりも人口も多く、文化も栄えるドイツ語圏第一の都市だったのだ。(その後、ベルリンに取って替わられるのではあるけれども。)

1918年まで、オーストリアは帝国だった。帝国には皇帝がいて、皇室一家がある。そして、皇室が国民にとって強い関心の対象なのは世の常だ。この関心に応えるべく、皇室の側でも、ふんだんに話題を提供した。スキャンダルである。1889年、皇太子ルドルフは愛人のひとりと自殺契約を結んで実行した。68年間皇帝の地位にあったフランツ・ヨーゼフは国民にそこそこ人気のある皇帝だったが、その妻エリーザベトとの関係は、必ずしも円満なものではなかった。シシィという愛称で知られるこの皇后、とても美しい女性であったことでも知られ、今日なお観光都市ウィーンが提供するアトラクションの一つであるが、精神的にはかなり不安定な人だったようで、ある年、皇帝フランツから、誕生日プレゼントに何が欲しいか、と問われて、「完全に設備の整った精神病院ですわ」と答えたというエピソードが残されている。1898年、彼女は旅の途上で暗殺される。

オーストリア帝国は、十を超える民族を支配下に置く多民族国家、多文化国家だった。ドイツ人だけでなく、ハンガリー人、チェコ人、クロアチア人、ポーランド人、スロヴァキア人、スロヴェニア人、ウクライナ人、ルーマニア人、イタリア人 etc. が住んでいた。もちろん、ユダヤ人を忘れるわけにはいかない。

だから、19世紀、ものすごく多くの有名な思想家や芸術家がオーストリアに生まれている。有名どころだけでも、思想家ではヴィトゲンシュタイン、フロイト、ルカーチ、文学者ではシュニツラー、ホフマンスタール、カフカ、カネッティ、音楽家ではスメタナ、ドボルザーク、ヤナーチェク、マーラー、シェーンベルク、画家ではクリムト、シーレ、ココシュカと、次々と名前が思い浮かぶのだが、興味深いことに、そのうちの何人かは、今日のオーストリアの生まれではないが、にもかかわらず生まれた時点ではオーストリア人だったのだ。(スメタナ(1824-1884)やドボルザーク(1841-1909)がオーストリア人、と聞けば、そんな馬鹿な、と言われるだろうが、少なくとも生きていた当時彼らがオーストリア国民だったことは事実である。)

19世紀に興味を持ち始めると、ドイツ語を学ぶことの醍醐味が急上昇するよう感じられる。それは、一つには、オーストリアが今よりもはるかに大きな国、帝国だったからであり、第二に、ドイツが文化的のみならず、政治的にも経済的にも急速に力をつけつつあったからだ。20世紀に入って、まず、1918年に、オーストリアが劇的に収縮した。ドイツは、1945年に領土の一部を失い、それにも増して大きな損失として、多くのユダヤ人国民を失った。ナチズムのユダヤ政策によって多くのユダヤ人が命を失い、あるいはヨーロッパを去って行ったのだ。明治時代にドイツ語を学ぶことと、平成の時代にドイツ語を学ぶことでは、その意味は少なからず異なっているのである。

【3】今日のドイツ

そういうわけで、かつてに比べるといささかしょぼくなってしまっているのではあるけれども、それでも、今のドイツ語圏がつまらないというわけでは決してない。それどころか、例えば経済面では、ドイツは、近年、ヨーロッパで「一人勝ち」と評されることもあるほどに順調である。その動向に乗っかるようにして、労働力、それも高い技能を備える労働力のドイツへの流入の勢いが止まらない。当然、ドイツ語学習への意欲も高まらずにはすまない。世界は英語一色で塗りつぶされようとしている、というわけでは決してないのである。

文化・芸術の面では、ドイツ・オーストリアというと、モーツァルト、ベートーヴェンといった音楽家や、ゲーテ、シラー、トーマス・マン、ヘッセといった文学者、カント、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーといった哲学者など、まずは過去の偉大な文化人の名前がいろいろと思い浮かんでくるとしたものだだろう。しかし、現代のドイツ文化だって、なかなか面白いのだ。しかも、簡単にアクセスできる。

いくつかの具体例に沿って見ていきたい。

《サッカー》

なんといっても、まず、サッカーだ。2014年のブラジル・ワールドカップはドイツのための大会だった、と言って言い過ぎではないだろう。ただ優勝しただけではない。あのブラジルを7-1で破ったのだ。まさに「夢のような結果」だった。かつては、ドイツのサッカーはただ力まかせの、あとは精神力だけの（日本では、大和魂をもじって「ゲルマン魂」などと呼ばれたりもするのだが）、要するに、美しくない、魅力に乏しいサッカーと要約されていた。それでも最後には勝つものだから、ますます反感を招いた。しかし、2014年のドイツチームのプレースタイルは、軽やかで華やかだったと言えるだろう。アルゼンチン戦の決勝ゴールを決めたマリオ・ゲッツェに代表されるように。そして、そのドイツの国内リーグである「ブンデスリーガ」で、多くの日本人選手がプレイし、結構活躍しているのは、ご存知の通りだ。

ドイツ語が読めると、ブンデスリーガがさらに楽しめるようになることは請け合いだ。なにしろ、ドイツのサッカー・ジャーナリズムは情け容赦がない。ナショナルチームに対してすら批判が手加減されることはなく、国民一体となって応援する、という具合には容易にならない。ブンデスリーガを報じるドイツの新聞記事など読み始めたら、日本での報道のみを通して接するのよりもはるかに激しく、厳しく、熱くドイツ・サッカーを楽しむようになるだろう。

《環境問題》

近年、ドイツが注目を集めた出来事として、2011年3月11日の東日本大震災とその直

後に起こった福島原発事故に対する反応ということがあった。さっさと、原子力発電からの撤退を決めてしまったのだ。しかし、その背景には、1960年代以来の、(西)ドイツにおける粘り強い環境(保護)運動の歴史がある。その運動の中から「緑の党」という政党が生まれ、今日では、常時およそ10~15%の国民の支持を得て、ドイツの政治を動かす無視できない勢力として定着している。

もちろん、原子力発電抜きのエネルギー政策が成功するかどうかは、予断を許さないところではあるが、しかし、環境問題に真剣に取り組むこの国の姿勢からは、多くを学ぶことができるはずだ。問題がないわけではない、だからこそ、学ぶのだ。例えば、風力発電設備は自然の景観を損なうのではないかと、というような問題提起の悩ましさは、ドイツの田舎の風景を身をもって経験することで、よりありありと実感できるようになるのではないか。

《映画》

ドイツ映画の歴史を振り返ると、1970年代に、「ニュー・ジャーマン・シネマ」と呼ばれる波があった。監督映画とも特徴づけられ、ライナー・ファスビンダー、ヴェルナー・ヘルツォーク、フォルカー・シュレンドルフ、ヴィム・ヴェンダースといった映画監督の強力なコンセプトのもと、芸術性の高い(場合によっては、難解な)作品が生み出され、高い評価を受けた。それに比べると、近年のドイツ映画は、『善き人のためのソナタ』(2006年)のように、日本でも結構話題になったまじめな映画もあるけれども、全体としては、むしろ、軽くてコミカルな内容のものの方が多い印象がある。人気俳優が出演し、娯楽性を馬鹿にしない。例えば、『ロッシーニ』(1997年)。作曲家ロッシーニの話ではなく、ミュンヘンにあるイタリア・レストラン「ロッシーニ」の常連客たち(主に、芸術家、文化人)が繰り広げる他愛もない人間模様を描く喜劇だ。副題が、「誰が誰と寝たか、という由々しい問題」というのだが、決してポルノ映画ではない。ところが、日本では『悦楽晩餐会』というタイトルでDVDが売り出され、TSUTAYAでは、ソフトポルノのコーナーに置かれる羽目になってしまった。(恥ずかしがらずに、借り出してください。)

『悦楽晩餐会』を筆頭に、私の好きな近年のドイツ映画を以下に並べてみたい。どれも、ほぼ娯楽作品だ、と言って虚偽申告にはならないと思う。

『厨房で逢いましょう』(2006)『マーサの幸せレシピ』(2001)『バンディッツ』(1997)『ノッキン・オン・ヘブズ・ドア』(1997)『ビターズウィート』(2002)『ギガンティック』(1999)『グッバイ・レーニン』(2003)『ラン・ローラ・ラン』(1998)。

《文学》

映画に比べると、(近年の)ドイツ語文学については、紹介能力が私には決定的に欠けている。二作を紹介するにとどめざるをえない。まず、ベルンハルト・シュリンクの『朗読者』(1995.新潮文庫)。シュリンクは、本職は法学者だ。ベルリンのフンボルト大学で教え

ていた。しかし、小説も書いていて、まず、ゼルプという名の探偵を主人公に配する推理小説で成功した。(『ゼルプの裁き』『ゼルプの欺瞞』『ゼルプの殺人』、いずれも小学館から翻訳されている。)しかし、大ブレイクしたのは『朗読者』で、この作品は日本でもベストセラーになった。映画化もされた(『愛を読むひと』)のだが、残念ながら、主人公の女性を演じたのがイギリス人女優で、英語の映画になってしまったのだった。この小説、恋愛小説でもあるが、それにとどまらず、ドイツの歴史が重要な背景をなしている。その観点からも、読み応えのある作品になっていると思う。

第二に、近年のドイツ語文学として、パトリック・ズュースキント『香水』(1985)も不思議な味わいのある面白い小説だ。邦訳が文庫化(文春文庫)されている。

《音楽》

音楽のことは、ほとんど何も知らないが、ニナ・ハーゲンというとても変な女性歌手がいる。ロックグループ「アインシュテュルツェンデ・ノイバウテン (Einstürzende Neubauten)」については武村知子『日蝕狩りブリクサ・バーゲルト飛廻双六』(2004年、青土社)という不思議な本がある。

一橋大学の場合、とくに大学のオーケストラのメンバーにとっては、その活動の中で会うドイツ語圏クラシック音楽がドイツ語世界への入口となる場合もあるだろう。ウィーンで活躍した作曲家についてはすでに挙げたとおり。「クラシック音楽」の世界では言葉のない器楽が大きな意味を持っており、人々は言葉のない音楽についてとくに19世紀以来ドイツ語で熱い議論を戦わしてきた……ということについては音楽を専門とする先生に聞いてみてください。

《哲学》

18世紀の終わりごろから1933年まで、ドイツ(とオーストリア)は、この世界にあって哲学の中心だった、と言ってよいだろう。でも、いまでは、中心はアメリカ合衆国に移った。面白い哲学書も圧倒的に英語で書かれ、せっせとドイツ語に(もちろん、日本語にも)翻訳されている。

でも、20世紀後半にも、ハンス・ゲオルク・ガーダマー(『真理と方法』、法政大学出版局)、テオドル・W. アドルノ(『ミニマ・モラリア』、法政大学出版局)、ユルゲン・ハーバーマス(『公共性の構造転換』、未来社)、アクセル・ホネット(『承認をめぐる闘争』、法政大学出版局)らによって重要な仕事が産み出されているし、何よりも、哲学は歴史を大切にする学問なので、過去にドイツ語で書いた立派なご先祖がいた事実は、いまなおドイツ語を学ぶ大きな理由になっている。カント、ヘーゲル、ショーペンハウアー、マルクス、ニーチェ、ハイデガー、ヴィトゲンシュタイン……と、名前を挙げだしたら止まらなくなるのだ。

《観光》

ドイツは観光大国だ。行って気持ちの良い国だといえるだろう。それが証拠に、私の周りでドイツに旅行に行った日本のオバチャンもおばさまも、大体ドイツが気に入って帰って来られる。なにより、ドイツが美しく清潔な国だという点が大きいようだ。ドイツというと、まずナチズムとか連想されて、なんだか重苦しく堅苦しくきまじめで暗い国といったイメージが浮かびもするわけだが、でも、そういうのはすぐには見えてこない。だから、おばさまやオバチャンにも気に入ってもらえるのだ。

もちろん、若者の中には、秩序よりも混沌（カオス）の方が性に合っている、だから、自分はスペインだ、イタリアだ、という人はいるだろう。でも、そういう人だって、例えばトイレが清潔なのは嬉しいのではないか。そして、ドイツでは、どんな安ホテルに泊まっても、トイレが不潔、ということはまずないだろう。

ドイツには、42 のユネスコ世界遺産（文化遺産と自然遺産）がある。けれども、それらは、必ずしも観光地として（日本で）有名なものばかりではない。若者向けの観光ガイドとしては『地球の歩き方』がポピュラーだが、でも、ドイツ語を学んで、インターネットで情報収集すれば、数々の興味深い発見が可能になるはずだ。

ドイツ・オーストリア観光が何よりも楽しいのは、田舎が美しいからだ。日本の田舎のようにうらぶれ、さびれていない。ど田舎出身の私は、日本の田舎に行くと、概して悲しくなるのだが、ドイツ・オーストリアでは嬉しくなる。ちなみに私が好きなのは、バハラッハ（ドイツ）、アモアバッハ（ドイツ）、ハルシュタット（オーストリア）、フラインスハイム（ドイツ）です。

《その他》

フランクフルトにいた時、私はウィリアム・フォーサイスひきいる「フランクフルト・バレエ団」の熱烈なファンだった。とても興奮した。（日本にもちよくちよく来ます。お薦めです。）

マンガといえば、世界の発信地の中心はダントツで日本だが（ドイツの書店に行けば、必ずマンガ・コーナーがあり、膨大な数のマンガが売られている）、ドイツにも面白い漫画家はいる。ラルフ・ケーニヒだ。男性同性愛者の世界を舞台に、次々と快作を生み出し、映画化もされている。（残念ながら邦訳されていないので、私は何年か前に「ドイツ語中級」の授業で *Der bewegte Mann* (Reinbek bei Hamburg 1987) を、DVDを見ながら講読した。）

【4】アーヘン短期ドイツ語研修、など

本当を言えば、週二回、90分教室に座ってドイツ語を学ぶ、というのは、あまり効率的な勉強法とはいえない。量的に不十分である上に、集中度にも欠ける。

やはり、ドイツに行って学ぶにしくはないと思う。一橋大学には、夏休み（8月）に4週間、希望する学生をドイツで行われる語学研修に送り出す、という制度がある。行き先はアーヘン。あまり知られていない街だが、オランダ、ベルギーに接するドイツ西部の街で、大学都市であり、歴史的にはドイツで最も由緒ある街の一つだ。8世紀末にフランク王国のカール大帝がこの街に居城を定めたのだ。2014年は、このカール大帝の没後1200年にあたり、特別展が開催された。

この短期語学研修、もともとのコンセプトでは、二年生を主な対象としているが、参加希望者が定員20名をオーバーしたことはなく、つまり、希望すれば一年生でも参加できた。実際、2014年以来、わずかながら1年生も参加してきた。大学から9万円程度の補助が出ることもあり、また、ドイツは物価が安いので、とてもリーズナブルなプログラムだ。内容的にもとても充実しており、過去8回、参加した学生諸君にはとても好評だった。毎年、報告集が作成され、以下のホームページにアップされているので、是非のぞいてみてください。

<https://sites.google.com/site/gogakukenshu/>

そういうわけで、ドイツ語は、教室で学んでいるだけでは十分とはいえない。教室以外でも、自分で勉強するという習慣を身につけてほしい。その可能性は、無数にころがっている。

かつてであれば、まず、NHKのドイツ語講座がお薦めだった。今でもお薦めできる。ラジオとテレビ、どちらも色々と工夫が凝らされていて、なかなか楽しい。

加えて、NHK・BSのニュース。早朝なので、時間的に苦しい面もあるが、日本のニュースだけ見ているのとは随分異なる世界が開けてくるはずだ。（ついでにフランスやイギリス、スペインのニュースを見るのも面白いだろう。これらの国は、かつて多くの植民地を持っていたことがあり、旧植民地について、結構丁寧に報じてくれる。スペインのニュースが報じる中南米のお話なんて、日本のニュースでは取り上げられる機会のないものがほとんどだ。）

けれども、今では、インターネット上に、膨大な数のとても良いドイツ語教材がアップされており、これが第一のお薦めだ。

【5】ドイツ語学習について、(最後に) ひとこと

よく、「ドイツ語は難しい」という声を聞く。しかし、これは、端的に、嘘だ。もちろん、新しい言語を学ぶことが難しくも何ともない、ということはないだろう。でも、思い出してもみてほしい。みなさんは、中学校で、**This is a pen** とか **I am a boy (girl)** とか学んだわけだが、今、それと同じことを、再び（ただし別の言語で）始めようとしているのだ。

それは、今や小学生が始めることだ。場合によっては、幼稚園・保育園から始めているガキどもだっているだろう。

つまり、こういうことだ。新しい言語を学ぶというのは、知的には、小学生でもできる作業なのだ。それを、18歳を過ぎた大学生がやるというのだから、こんな馬鹿馬鹿しい話もない。大学生が第二外国語を学ぶに際してモチベーションが上がらないのは、それがやさしすぎるからだ。難しすぎるからでは断じてない。あまりにやさしすぎて、単純すぎて、やる気が起きにくいだけの話だ。

だから、もし、やる気を起こし集中して学ぶならば、教室で一年かけて学ぶ予定の内容が、1~2ヶ月もあれば独習できるはずだ。(やってみようと思う人は、試しにやってみてください。) 本当は、一年もかけてやる勉強ではないのだ、初級ドイツ語なんて(大学の授業の中で、知的には一番やさしい科目です)。

そういうわけで、初級ドイツ語の試験でろくな点数の取れない人は、怠けていたからだ、と100%決めつけることができる。小学生でもできることが難しすぎるはずがない。

付言すれば、ドイツ語がやさしい理由に、それがとても英語に似ていることがある。もちろん、違いもあるが、似ているところの方がはるかに多い。

ドイツ語と英語の違いの一つは、発音だが、両者を比べれば、ドイツ語の発音の方が英語の発音よりはるかにやさしいはずだ。舌を嚙んだり丸めたり、そんな変なこと、何もしなくてよいのだから。

というわけで、ドイツ語の世界へ、ようこそ。